

二次元ぶち文庫

試し読み版

けんきたちのたそがれ

# 剣姫達の黄昏

上田ながの

表紙イラスト：つづきますみ

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『剣姫達の黄昏 前編』  
『剣姫達の黄昏 後編』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



けんきたちのたそがれ

# 剣姫達の黄昏

上田ながの  
表紙／つづきますみ

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

### Characters

---

#### ナリア＝サリューン

かつては一国の聖騎士を務めた女騎士。国が滅びた際、敵兵に捕らわれ、奴隷身分に落とされてしまう。想い人である王子が、国を再建すると信じている。金髪、スレンダーの美女だが、性知識には疎く、経験もない。

#### ルーナ＝ウィンド

病床の妹を助けるために借金をし、返済の為に剣奴となった元女傭兵。褐色の美巨乳と腰回りだけを隠す鎧姿が扇情的な美女だが、戦場で女を犯し殺す下種な男達を目の当たりにしたため、実は男が苦手。

「シスムド王国十二聖騎士の一人も、こうなつてしまふとお終いですな」

口調こそ丁寧なもの、隠すことのできない下劣な笑みを口元に浮かべながら、男が口を開く。男の名はゲオルグ——意地汚い武器商人だ。

「いや、しかし……噂には聞いていましたが、本当にお美しい方ですなあ。この金色の艶やかな髪……まるで絹のようだ。肌も実にきめ細かい。透けるような白さが実に私の好みですよ。それに……この胸。お世辞にも大きいとは言い難いですが……」

ピクリツとゲオルグの言葉に女騎士の眉根が反応する。

「形は実に美しい。騎士服の上からでもはつきりと分かりますよ。それにこのプルンツとした尻。すぐにでもむしゃぶりつきたくなる。まるで古の女神のように完璧な身体です」語りながら男は腕を伸ばし、遠慮なしに女騎士の全身を撫で回した。男の醜く、太い指に触れられることに不快感を覚えているのか、騎士の表情は冷たい。

掌が胸元を撫でた。括れも繰り返し擦り、尻まで驚掴みにする。

「どうですか？ 気持ち良くなつてきましたか？」

男が顔を寄せた。鼻にかかる息が臭いのか、女騎士が顰め面を浮かべる。

「……男の癖にべらべらとよく喋る奴だな」

青い切れ長の瞳を冷たく光らせながら、一言斬り捨てるような言葉を吐き出す。凜とした声がゲオルグのテント内に響く。言葉だけでも人を切り裂けそうな、鋭い声だった。

「おお！ 怖い怖い。流石さすがは歴戦の勇士ナリアⅡサリユーン殿下。この状況にあつてもまるで動じた様子を見せませぬな」

わざとらしくゲオルグは怯えたフリをしてみせる。この様子にテント内にいた数人の騎士達が笑った。彼らはシスムド王国を滅ぼしたガレリア帝国の騎士達である。

シスムド王国十二聖騎士の一人であるナリアⅡサリユーンの敵だ。戦場ではナリアの剣舞の前に怯え、逃げ惑っていた連中である。だが、今の騎士達はナリアに対して怯えは見せない。何故なら戦は終わったからだ。シスムドの敗北という形で……。

そして現在、敵に捕らえられたナリアは、奴隷としてゲオルグに売られようとしている。  
(枷さえなければ……こんな連中など……)

人数はゲオルグも含めて十人。この程度の数であれば、本来ならば何の問題もなく切り裂くことができるのだが、ナリアの二の腕には封印の枷がつけられている。これによって身体能力は著しく制限されてしまっていた。ここで剣を抜けば、間違いなく殺されることだろう。

死ぬことは恐ろしくない。王国最強の十二聖騎士に選ばれた時から、その覚悟はとつてにできていた。

ただ、だからといって無駄死にするつもりはない。

(まだシスムドは終わったわけではない)

シスムド王国王子カルナックⅡファイゼルⅡシスムドは未だ健在であり、地下に潜って対ガレリアへの反攻作戦を行おうとしている。カルナックの為に、意味もなく命を散らすわけにはいかなかった。

『必ず生きてくれナリア。ボクは……君を愛してる』

敵の放った炎で燃えさかる王宮での別れを思い出す。王子はナリアを真っ直ぐ見つめ、偽りのない気持ちを出してくれた。

『……はい』

ずっと王子を想い続けてきたナリアにとって、涙が流れ出そうになるくらい嬉しい言葉だった。

『私は死にませんよ。私は殿下の剣ですから。殿下の為に必ず生きて帰ります』

『ナリア……』

抱きしめられキスをされた。優しい感触だったことは決して忘れられない。

あの時の誓いを破るわけにはいかなかった。

最悪な状況下に落とされようと、自害せず、無駄な抵抗もしない理由はそこにある。

(生きてさえいれば……必ず勝機は見いだせる……)

奴隷として売買されつつあっても、ナリアの瞳は油断なく輝いている。

\*

病の妹を救う為、ルーナIIウィンドは劍奴となった。

元々ルーナは女の身ながら傭兵であり、戦うということに関しては慣れている。命の奪い合いも何度も経験してきた。だからだろうか、劍奴になること自体には正直なところあまり抵抗はなかった。

『やだよお姉ちゃん。劍奴なんて……』

妹のフアラは泣き出しそうな顔になりながら反対したけれど、ルーナは彼女に対して笑ってみせた。

『大丈夫だつての。アタシを誰だと思ってる？ ルーナIIウィンドよ。戦場じゃ紅い旋風なんて二つ名で呼ばれるくらいなんだから。だ・か・ら・あんたが無理に心配する必要なんかないの』

劍で自分が後れを取ることなど有り得ない。すぐにフアラの治療の為に作ってしまった借金など返して、またこの家に戻ってこれるだろう——本気でそう思っていた。

事実、劍奴としてルーナは試合に出るたびに勝利している。

紅く、長い髪を風になびかせ、馬さえも切り裂けそうな、身の丈程はある巨大な劍——クレイモアを振り回し、褐色の大きな胸と腰回りだけを隠す鎧を返り血で染めながら、何人も敵を斬った。

「いや、流石流石。紅い旋風の面目躍如といったところだなあルーナ。見事な勝利だつ



たぞ」

奴隷商のミハエルが薄汚いひげ面で笑う。こいつがルーナを劍奴として買った男だ。

「たりめーだつつの。あの程度の奴にアタシが負けるかって話だろ」

「まあそりゃそうだ。うし、それじゃあこれが今日の取り分だ」

無造作に金が入った袋を投げつけてくる。それを受け取ると、すぐに中身を確認し――

ルーナは鋭い視線でミハエルを睨んだ。

「おい、これだけかよ」

袋の中身はいつもより明らかに少ない。ミハエルは睨まれながらも動じることなく、肩を竦めてみせてきた。

「わりいな。こっちの稼ぎが少なかつたんでな。なんつーかさ、おめーが強すぎるから、全然商売にならないんだよ」

劍奴同士の試合では公然と賭けが行われており、この男は胴元の一人である。

「強すぎるから商売にならない？ どういうことだよそれ」

「どうって……だから、おめーの試合になると、みんなが揃っておめーに賭けるようになつちまつたんだよ。だからこっちは商売あがったりってワケだ」

胴元をする理由は単純に儲かるからだろう。実入りが少なくなつてしまえば、必然奴隷であるルーナにしわ寄せが来ることになる。

「だからってこれじゃあ……」

これっぽちの金しかもらえないのであれば、いつまで経っても自分を買い戻すことなどできない。

「じゃあ偶には負けてみるか？」

「……そんなことできるかっての……」

負ければミハエルは当然儲かるのだろうが、この場合ルーナにメリットは少ない。剣奴は勝たなければ金をもらえない上、負けると借金が上がるという契約になっている。だからといって勝つたら確実に幾らもらえると決まっているわけでもない。奴隷契約というのは、あまりに一方的な形で成り立っているものだった。

負けて儲けさせても、その分ルーナの借金を引くということをするような男でもない。細々とであつても返していくしか手段はなかった。

『……早く帰ってきてねお姉ちゃん。お願いだから……』

別れ際の約束を思い出す。ファラは今にも泣き出しそうな表情だった。肩を震わせ、俯く姿は本当に小さい。

『分かつてる。すぐに帰ってくるから。姉ちゃんを信じな』  
思わず抱きしめていた。

あの約束を破るわけにはいかない。

(しかしどうすればいい?)

ミハエルを動かす術はルーナにはなかった。

(こいつを斬つて逃走するか?)

一瞬殺気を噴出させるが、すぐにそれは無理だと悟つて首を横に振る。奴隷が主人に反抗するのは重罪だ。ミハエルのもとから脱出すること自体は簡単だけれど、その後は国そのものが追つ手となる。如何にルーナとはいえ、逃げきる自信はない。

だからといって地道に剣奴だけこなしでも……。

「金が欲しいか？」

悩んでいると、ミハエルがニタニタしながら話しかけてきた。どうにも気に食わない表情である。何事かを企んでいるのは間違いないだろう。それも、ルーナにとってはあまりよくない話のはずだというのは、顔を見ればよく分かった。

「何か儲け話でもあるのか？」

だからといって無視はできない。今はどんな手段を使つても、奴隷身分から脱却し、フアラのもとへ戻りたかつた。

「なあに、簡単な話さ」

男は軽く囁く。口元に浮かぶ笑み。邪心の塊のような顔だつた。

「ひっ！ あっあっあっ！ んひいっ!!」

室内に愉悅の色が濃く混ざったルーナの嬌声が響く。快楽を隠すこともできず、ベッドの上で淫らに腰をくねらせた。

「どうだ？ 俺の技は最高だろ？」

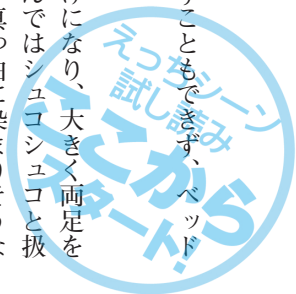
花卉に対してルーファスが執拗に愛撫してくる。ベッドに仰向けになり、大きく両足を開いたルーナに覆い被さりながら、指先で肉褻を撫で、淫核を摘んではシユコシユコと扱ってきた。ピチャリツと媚肉を舐められると、それだけで目の前が真っ白に染まりそうな程の肉悦を感じてしまう。

娼婦として働くようになってから、何人もの男達に抱かれてきたけれど、その全員が己の快楽のみを追求するような連中だった。ルーナはただひたすら男達の行為が終わるのを待つだけだったのだが、ルーファスは違う。

自身の愛撫で女が噎び泣くことに無上の喜びでも感じているかのように、ひたすら前戯を繰り返す。

「ひっひっひっひっひいひい」

膣中に挿入された指で蜜壺を容赦なく掻き回されると、自然と腰を突き出し、ガクガクと膝を震わせてしまう。クパツと開いた膣口からは、留まることなく愛液が漏れ出し、ベツドシートに染みを作っていた。



「俺の指を締めつけてくるぞ……。そんなに気持ちがいいのか？」

当然愛撫によって感じてしまっていることはルーファスにも気づかれてしまう。優越感に充ち満ちた表情が憎らしかった。

「だ、誰が……。こ、この、へ、下手くそ野郎!!」

愉悦を覚えてしまっているのは事実だったが、絶対に認めたくはなかった。男を睨み、鋭い言葉を返す。が、やせ我慢にしか見えない。

「なかなか強情な奴だな。しかし、そうでないと面白くない。あの紅い旋風を屈服させるのがあまりに簡単だと拍子抜けだからな」

「お、お前なんか……。ふうーふうー、く、屈服なんかするかよ！」

「そうかそうか……。さて、では何処まで耐えられるか見物だな。いくぞ」

ルーファスはベッドに寝転がるルーナの上のし掛かってきた。勃起した肉棒の先端部が、すっきり濡れそぼった花卉に密着する。

ぐちゃりっ！

「んひっ！」

淫肉に触れただけだというのに、それだけでビクリッとルーナは全身を震わせてしまった。肉褻が貪欲に肉先に絡みついていく。

じゅぶっ！　ぐじゅぶるるっ！

「あつ！ んんんんああつ！ お、おつき……ひっひっんんんん!!」

膣道が拡張されていった。胎内を灼熱の肉棒が蹂躪してくる。ただの挿入だというのに、目の前が真っ白になる程の快感を覚えた。思わずルーファスの背中を抱きしめてしまう。無意識のうちに腰を突き出し、ペニスをより肉奥まで導こうとしてしまう。やがて龟头は膣奥にまで到達し、ズンツと子宮口を叩いた。

「ひっ！ あつあつああああ!!」

思考が飛ぶ。全身が壊れた玩具のように何度も小刻みに痙攣した。結合部からは愛液が飛び散る。背中が弓形に反り、だらしなく口が開いた。

「あ、あへええええ……」

全身を心地よい脱力感が包み込んでいく。ルーナが初めて知る絶頂だった。

「おいおい、何だ？ もしかしてお前……挿入れただけでイッチまったのか？」

この姿にルーファスが呆れ顔になる。

「だ、だへが……い、いつへなんて……ふ、巫山戯たことを……ハアハアハア……い、い、うなあ……」

認め難い事実であり、当然男の言葉を否定するのだが、呂律が回っておらず何の説得力もない。

「そうだよな。まだまだ始まったばかりだもんな」

だというのに、男はあっさりルーナの言葉を受け入れた。

「本当に感じるのここからだもんな」

嗜虐的な笑みをルーファスは浮かべると共に、ピストン行動を開始した。

ずちゅっずちゅっずちゅっずちゅっ！

「んひっ！ あっあっあっあっ！ お、おつく、奥に、奥に当たって！ くひい！

だっめ、今は、今はダメえ！」

巨棒が膣道を擦る。粘膜と粘膜が混ざり合い、快楽となつて火花を放った、一定のリズムで男は膣奥を突いてくる。同時に乳房に対しても愛撫してきた。指で乳首を転がし、優しく乳頭を吸い立ててくる。

初めて自分を犯した相手の時には苦痛しか感じなかった行為だというのに、舌で擦るように乳首を刺激されるだけで、ルーナの肉体は何度も蕩けそうになってしまった。

（な、何だこれ？ くそっ、か、感じるな……こいつは……さ、最低野郎なんだぞ……こんなクズに感じるなあっ!!）

必死に心の中で自分自身に言い聞かせるものの、湧き上がってくる感覚を抑えることなどできなかつた。

「気持ちがいいなら気持ちいいと素直に口にした方がいいぞ」

「き、きもちよ、くなんつか……あっあっあっ……ね、ねーよ！」

否定はするのだが、男の動きに合わせて自ら腰を振ってしまっている。自分自身が食欲に快楽を貪っているかのような動きだった。

腰をグラインドさせるたびに、ペニスは大きさを増していく。これによって膣壁に感じる肉悦はより大きなものとなり、女傭兵は更に噎び泣くこととなってしまった。

「そろそろいくぞ」

じゅっばんじゅっばんじゅっばんじゅっばん！

「ひっ！ あっ、は、はげっし、激しすぎるっ！ こ、こんなの、お、おかしくなっ！ あ、アタシが、アタシがおかしくなっちゃまうっ!!」

蹂躪はより激しさを増す。膣中の亀頭は今にも爆発しそうな程に大きくなっていった。ベツドが軋み、身体が激しく揺さぶられる。ズンツと膣奥に肉先が叩きつけられ――。

ぶびゅぼっ！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅどっびゅるるるるっ!!

「んあっ！ ひっひっひっ、こっれ、だめ！ くっする！ きちやううう！ いく、イクの!! アタシ、あたひいぐのおおおっ!!」

熱液が胎内に一気に広がった。最早耐えることなどできはしない。肉体の籬は外れ、絶頂の愉悦にルーナは溺れた。

「はひーはひーはひーはひー」

脱力感だけではない。幸福感さえ感じてしまいながら、女傭兵は何度も荒い息を吐く。



足は蟹股に開かれ、肉棒が挿入されていた膣口はパツクリと口を開いたまま、濃厚な白濁液を垂れ流していた。

膣中に射精されることに対する抵抗感が浮かんでこない。膣中に感じる熱気に安らぎまで感じていた。

「最高だったぞルーナ。お前は極上の女だ。次も是非指名させてもらおうぞ」

「は、はひ……あ、ありがとうございます……」

娼婦は自然と礼の言葉を述べてしまう。

「あつ！ い、いいのっ！ 凄くいいっ!! あつあつあつあつ！ き、気持ちいい！ それすげー気持ちいい!!」

それから何度となくルーファスはルーナのもとを訪れた。何度も抱かれ、何度もイカされた。情交するたびに、肉体はより強く快楽を感じるようになっていく。最早愉悦を隠すことなどできなかつた。

自ら快楽を口にし、自ら腰を振る。相手が最低なクズだということも忘れ、男の上に跨がって、女を犯す男のように下腹部をくねらせた。

「いっつく！ またいっつく！ よすぎてイッチまう!! あーあーあーあーあー」  
発情した獣のような姿で、嬌声を響かせる。

した。

「しょ、しょん——おぼっ……な、ろ、らっめ……」

血の気が引いていく。そのような行為絶対許されるはずがない。肉棒を咥えたままであっても、流石に声を上げてしまうが、勿論聞き入れてもらえないはずなどなかった。じゅぐつ、じゅずずつ、ぶじゆるるるつ！

「んほひっ！ おっ、おほおおおっ!!」

肛門が拡張されていく。浣腸器とは比べものにならない程太い異物が、排泄器官を逆流してきた。ペニスの熱気が腸壁に押しつけられる。それだけで尻が切なく震えた。

（だつめだ！ こ、こんなの、無理だあ！ 尻が、私の尻が裂けるっ!! こ、壊れてしま  
う！ 漏れる！ こんなに漏れてしまううっ!!）

更に便意を増幅させる行為でもある。尋常でない事態に、ナリアの顔には恐怖の色さえ浮かんでいた。

ぶじゅぼつぶじゅぼつぶじよぼつ！

「おぼっ！ くほっ！ むっひ、らっめ、お、こ、こんなのらっめえええっ！」

口腔と肛門。二つの穴に差し込まれる肉棒が、同調するように動き出す。遂にはこれまで必死に耐えてきた懇願するような声まで上げてしまっていた。

だが男達は止まってはくれない。それどころか初めてナリアが見せた弱気な態度により



興奮を増したのか、更に激しく腰を叩きつけてきた。

（お、なかのなつかが、か、かきませられてっる！ おか、しくなるっ！ こんなのお、おかしくなってしまうう！）

肉棒が腸奥を叩き、引き抜かれるたびに、ブビツと空気が漏れる音が響いた。まるで放屁音のようにも聞こえる。

「おいおい、屁でもこいてるのかよ。ひでーなあ」

耳聡い男達がこれを聞いてゲラゲラ笑った。

「き、きぐつなあ！ おっおぼおっ！ むびよっ！ は、はげっし、はげしすぎっる！ んぼっんぼっんぼっ！」

抗議の言葉も途中で遮られてしまう。男達は射精に向けてラストスパートをかけるように、ピストンを叩きつけてきた。二本の陵辱棒が同時に肥大化し――。

ぶびゅぼっ！ びゅぼっびゅぼっびゅぼおっ！

「むひよっ！ ぴよおおおお」

熱液がナリアを穢す。尋常な量の射精ではなかった。一瞬で口腔は満たされ、両鼻から白濁液が鼻水のように飛び出す。直腸にも液体が追加され、ブビユツと結合部から圧力で汚液が飛び散った。

「あ、ふああああああ。おえ、うえええええ」

吐き出された熱液が再び胃に溜まっていく。

「も、漏れる……おねがいら、とひれ、とひれにいかしえてくれえ……」  
括約筋はもう限界に達しそうだった。

「大丈夫。俺が蓋をしてやるから」

「へっ？ んぐひっ！ くひいひいっ!!」

じゅぶぽっ！ ぶじゅぽおおおおおお！

「まった、また、まだぎだあああああ」

休む間などない。新たな肉棒が差し込まれる。

「さくて、俺はこっちだ」

口の前に突き出される肉竿。まるで無間地獄のような光景だった。

「んぐちゅっ！ ぶちゅっ、んぐひいひい」

一体何人の精液を口腔に注がれ、何人の男達に肛門を陵辱されただろうか？ 最早ナリ  
アにはそれを数えることさえもできなくなっていた。

既にナリアの口回りは白濁液でべとべとになっている。美しいヒップも、男達の汁でド  
ロドロだった。

びゅぶぶっ！ どびゆるるるっ！

「むひよえああああ」

新たな精液が口腔に注がれる。そのままその男は背後へと移動し――。

じゅぽっ、ぐじゅぽおおお。

「も、もうい、お、おじり、おじりらめえええ」

肛門へと肉棒を挿入してきた。

尻を驚掴みにされ、パンパンパンと音を立てながら腰を叩きつけられる。同時に掌で何度も臀部を叩かれた。

「ひっひっひっひっひい！ やつめ、そ、そつれ、それもれるっ！ 漏れちゃうかつらああああ！ おっおっおっおおお」

白い尻が紅く染まっていく。パシッパシッと叩かれるたびに、身体の芯にまで刺激が届いた。それが便意を増幅させていく。ギュルルッパシッと響く下品な音を止められない。いつ漏れてしまってもおかしくなかった。必死にナリアは括約筋を締める。が、それが男を更に喜ばせてしまっていた。

「おうおう、こんなに締めて。そんなに俺のものがいいのか？」

「ち、ちがつ——おっほおおお！」

ばちゅんっばちゅんっばちゅん！

自分の意思とは無関係に男を喜ばせてしまう。これ程矜持を傷つけられる行為はなかつ

た。下腹部を襲う苦痛。尻を陵辱される屈辱。様々な苦しみがナリアを苛む。耐え難いとどった。

「やっめてくつれ、た、のむ……頼むからあ」

遂には懇願までしてしまう。相手が最低のクズだということは理解していたが、止めることはできなかつた。

「止めるじゃないだろ。ほら、あと少しだぞ。俺で終わりだ。これに耐えれば便所に行けるんだぞ！ 耐えてみせろ！」

ケラケラと男は笑い、よりスパンキングを激しくしてくる。

パシッパシッパシッ！

「おつ、さ、さいつご！ ふぐーふぐーふぐー！」

これが最後だという言葉だけは、はつきりと届いた。

（これで終わり。これさえ耐えれば、と、トイレ……トイレに行ける……）

希望が湧いてくる。ナリアは必死に唇を噛み締め、暴風に耐えた。

そして――。

「くっ！ たっぷり喰らえ！」

ぶびゅぽっ！ どっびゅどっびゅどっびゅどっびゅどっびゅるるるるっ！

「むっひいひい！ おっおっおっ！ んき、きたああああ！ さいつごの、せ、精液き

って、わ、わたっひ、んああああ」

限界まで汁を注ぎ込まれていた腸内に、新たな熱液が広がる。この感触に目の前が真っ白になった。ビクッビクッビクンッと何度も身体を震わせる。太股が小刻みに痙攣していた。

「あ、あへああああ……た、耐えた……わらひは、た、たえたじよお」

酷すぎる陵辱、人の尊厳を踏み躪るような行為だったが、それでもナリアは力なく笑う。この女騎士に対し、パチパチとゲオルグが賞賛の拍手を向けてきた。

「いやぁお見事。流石は十二聖騎士だ。ふふ、約束通りトイレにいかせてあげましょう。ただし、まずは精液の処理が済んでからです」

「し、しょ、処理？」

一体何のことだろうか？ 首を傾げると、ゲオルグはたっぷり精液が溜まった胃を指差してきた。

「そこに入っている精液をすべて飲み干して下さい。手を使わずに口だけでね」

「そ、そんなこと……」

犬畜生のようにこの汚液を飲めというのか？ 許容できるはずがなかった。

「していただきますよ。やらなければトイレに行けない。それだけです」

「……く、う……わ、分かった……」

額かざるを得ない。この場での絶対上位者はゲオルグだった。

（早く……早く飲まない……）

既に肛門は限界に達しそうになっている。括約筋が悲鳴を上げているのが分かった。青ざめた表情を浮かべながら、たっぷり白濁液が詰まった胃の中に顔を入れていく。

（臭い……うろうう）

匂い立つ牡汁の臭気が鼻をつく。本来ならば、このような液体を飲み干すなど考えられないことだった。これを飲むくらいならば死んだ方がマシだとすら思える。しかしそれはできない。カルナツクの為にも死ぬわけにはいかなかった。

「うう……びちゃっ……くちゅっ……ごきゅっごきゅっごきゅ……うげっ、うえええ」

犬のように舌を伸ばし、白濁液を搦め捕ると、それを喉奥へと流し込んでいった。液体というにはあまりに濃厚すぎる精液は、喉奥に絡みつく。結果何度も咳き込むことになってしまった。

ちゅぷっちゅぷっちゅぷっちゅぷっ……。

「ふうーふうーふうー」

口回りが白濁液でグシャグシャになっていく。

「無様すぎるなあ。ええ、まるで犬じゃねえか！」

パシンッ！

「ひいっ！」



この瞬間、騎士の一人が尻を叩いてきた。一瞬で便意が増幅する。

「お、面白そうだなあ」

パシンッ！

「俺もだ！」

パシンッ！

「ひっひっひいひいひいっ！」

胃に頭を突っ込んだままのナリアの尻が、何度も叩かれる。抵抗する力もなく、されることがままになるしかない。

「だつめ、や、やめっ！ も、もれっる！ そ、そんなの漏れるからあつ！」

少女のような懇願することしかできなかったが、当然聞く耳など持つてはもらえなかった。  
 (ダメだ。もうダメだあ……殿下……も、申し訳ありません……)  
 肉体は限界を迎えてしまう。

そして――。

「んひっ！ んひいひいひい！ 見るな！ 見るなあああああ！」

ぶぽっ！ ぶぽぽぽぽおっ！ ぶっしゃああああああ！

肛門は決壊した。散々流し込まれた浣腸液と、白濁液が混ざり合った汁が、噴水のように噴き出す。

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**